

当科における腹腔鏡内視鏡合同手術時の内視鏡医との連携

東邦大学医療センター大橋病院外科 長尾 さやか (ながお さやか)

齊田芳久、中村陽一、榎本俊行、片桐美和、高林一浩、大辻絢子、
長尾二郎、草地信也

東邦大学医療センター大橋病院消化器内科 佐藤浩一郎、伊藤紗代、北川智之

胃粘膜下腫瘍に対して、腹腔鏡・内視鏡合同手術（以下 LECS）が近年報告され、当教室においても内視鏡胃の協力のもと施行している。現在まで7例を経験し、うち2例は胆嚢摘出術も同時に施行している。4例で検体を経口ルートで摘出している。手術平均時間は243.5分であった。当科ではより術後の変形を少なくするため胃切開創を手縫いで縫合しているため自動縫合器での縫合に比べ手術時間は延長する。内視鏡医は通常のESD施行時には、患者を左側臥位とし術者は患者と向かい合う位置、介助者は尾側に立って頭側と対側のモニターを見る位置で手技を行う。LECSの際は清潔野が近く慣れない環境・体位で手技を行うこととなり、内視鏡医のストレスにつながり手術時間の延長の一因にもなる。内視鏡医とカンファレンスを行い、全身麻酔の後病変粘膜下全周切開までは通常のESD施行と同じ体位やセッティングの内視鏡優先とし、その後に腹腔鏡観察下に全層切開とする方針とした。それまでの症例の平均手術時間は307.7分、その後の症例では158分と手術時間の短縮を認めた。腫瘍の局在やサイズ、内視鏡医・腹腔鏡外科医・介助スタッフとも手技に慣れたためなど様々な要因が考えられるが、内視鏡手技を本来の方法に近づけて行うことで手術時間の短縮が可能であった。今後も内視鏡医と連携し症例を重ねて行きたい。